

秋 冬  
春 夏

# 台湾徒然



第45回

## 「草風館」の風

この春、東京の草風館より『台湾原住民文学選第7巻 海人・獵人』が刊行された。これで台湾原住民文学選全9巻が完結することになる。

台湾には、人口2%未満ながら十数民族約40万人の先住民族が山間部を中心に生活圏を築いている。オランダ、清、日本、国民政府と、次々に外来諸民族の軍事的・経済的な侵略や圧迫をうけながら、その伝統文化を保ち続ける世界的にも稀有の民族群である。

数年前から、日台の研究者が共同して、彼ら自身が綴った文学選集の編訳と刊行に取り組んできた。この困難な編集作業を地道に進めてきたのが、草風館という東京の小さな出版社の内川千裕社長と妻喜美子さんである。

内川氏は1979年に独立して自身の出版社を立ち上げ、30年にわたって、水俣病やハンセン病とたたかう人びと、また在日韓国・朝鮮人やアイヌ・台湾原住民といった、歴史の大河に翻弄さ

れながらもひたむきに生きる人びとの声を、出版という事業を通して世に問うてきた。そうした志をもつ編集者はおそらく少なくないだろうが、この厳しい時代環境の中でここまで会社を維持してこられたのは、その人柄も大きく寄与していたのではないかと

台湾にも幾度かこられていつしよに紹興酒で乾杯したり、神保町で黒ビールをごちそうになったりした。未熟なわたしでも初対面から対当に扱ってくださり、いろいろな薫陶を受ける幸運に恵まれた。その内川さんから最新のメールをもらったのは、2008年7月13日午後10時15分。その最後の部分は、次のように書かれていた。

今取り組んでいる「最後の」出版企画が陽の目を見ることができるとか余命との格闘の最中です。いのちを今ほど感じることはありませんでした。浦安 内川

浦安 内川

浦安というのは、ガン再発をきっかけに、神保町をひきはらって、実家に仕事場を移されていたからである。

このメールから20日ばかりあとの、8月4日午前11時31分、内川千裕は風のように旅立った。享年71歳。死の床に伏す間際まで校正のペンを持ち続けたという。

彼が亡くなる間際まで精魂を傾けた台湾原住民文学選の編纂は、それから半年を経て、その遺志を受け継ぐ人た



先住民自身が綴った文学選は世界的にも珍しい

ちの手でついに全9巻の偉業が完成したことになる。

編集委員の下村作次郎氏によると、もともとこの選集発行の相談は内川氏のほうからもちかけられたものだといふ。もう12年も前のことである。いつも穏やかな笑顔を絶やさなかった内川氏がどのような動機からこの冒険に挑

まれたものか、内川氏はいつものことながら、誰にも語ってはいない。わたし自身も、もう十数年のお付き合いになるのだが、振り返れば彼自身のこと

はなにもうかがった記憶がない。ずいぶん政治的なテーマに挑戦してこれたようにおもうのだが、自身の主張や評論めいたことも一度も耳にしたことがない。寡黙で酒を愛した孤高の編集者

者は、台湾原住民文学選全9巻という重い遺産を置き土産にひょうとこの世を去った。さらに彼が残した多くの仕事を、妻の喜美子さんが浦安の町で引き継いでおられる。

### 柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ  
京都市生まれ。99年度「潮質」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に『台湾先住民・山の女たち』の聖戦（現代書館）『台湾革命』（集英社新書）『明治の冒険科学者たち』（新潮新書）など。最新刊に『ノンフィクションの現場を歩く』台湾原住民と日本（かわさき市民アカデミー出版部）